

だれが干潟を守ったか

—有明海に生きる漁民と生物—

山下弘文



人間選書

だれが干潟を守ったか

—有明海に生きる漁民と生物—

山下弘文



人間選書

142

山下 弘文 (やました ひろふみ)

1930年長崎県生まれ。高知大学文理学部理学科生物専攻卒。佐賀県水産試験場有明海分場、長崎県水族館勤務。全国自然保護連合理事。現在エコロジカル・プランニング研究所設立準備中。

著書 『有明海・諫早湾からの報告』(長崎県地方自治研究センター)『環境破壊に抗して』(自費出版)『干潟を守る—有明海・諫早湾』(武蔵野書房)『ルポ エネルギー備蓄』(技術と人間)

だれが干潟を守ったか

—有明海に生きる漁民と生物—

人間選書 142

1989年7月15日 第1刷発行

著 者 山下 弘文

発行所 社団法人 農山漁村文化協会

郵便番号 107 東京都港区赤坂7丁目6-1

電話東京(585)1141(代)振替東京2—144478

ISBN4-540-89075-1

印刷／亨有堂

〈検印廃止〉

製本／明光社

©山下弘文1989

定価はカバーに表示

Printed in Japan

はじめに

有明海・諫早湾の干潟の海は、いま豊饒である。

冬、堤防の上に立って見渡すと、はるかかなたまで、数万本のノリヒビが立ち、干潮ともなると三〇〇〇ヘクタールの広大な干潟に、数万羽の渡り鳥が乱舞しているのが望見できる。堤防のあちこちでは、特産魚であるハゼクチやワラスボを目的とした釣天狗が、釣糸をたらしている。タイラギの潜水漁業やカキ打ちも、いまが盛りである。

夏ともなれば、珍魚ムツゴロウの天下となる。泥深い干潟では、大人も子供も泥まみれになって、これまた特産品であるアゲマキとりがさかんになる。干潟の一面に、ピクリとも動かない数知れない動物が見える。甲らぼしをしているヤマトオサガニである。

諫早湾は、日本一の重要貝類の生産地である。その生産力は、海の最大の生産力に近く、魚介類だけ、一年間、一ヘクタールの干潟から二二・六トンの生産力がある。

一九六〇年以降、東京湾、大阪湾、瀬戸内海など、海産生物や野鳥にとってもっとも大切な藻場^{もば}を持つ全国の干潟は、高度経済成長の名のもとに、つぎつぎと埋め立てられ、消滅していった。これに対し、干潟を守る運動はけっして強力なものではなく、苦悩に満ちた闘いが続けられていた。

諫早湾の干潟も、他の海域と同様、戦後、開発の嵐にもみにもまれてきた。その歴史は、たんに諫早湾沿岸住民のみならず、有明海沿岸の佐賀・福岡・熊本三県の漁民・住民をまき込んだ一大闘争として展開されていたのである。

一万ヘクタールの干潟の海を守る闘いは、諫早湾淡水湖水質委員会の会長であった末石富太郎大阪大学工学部教授が、いみじくも語った、「南総事業（長崎南部地域総合開発事業）のなりゆきは、今後の日本の環境問題を左右するだろう」との言葉どおり、全国の住民団体から注目される闘いとして展開されていたのであった。

私は、この闘いに、一九七三年からかわってきた。そのスローガンは「負けてもともと、勝てばおおごと」であった。一九七七年五月、湾内漁民が二四六億八〇〇〇万円で、漁業権放棄のための漁業補償金交渉が大筋妥結し、闘いがピンチになった時期、私たちは、第三回全国干潟シンポジウムを開催した。このとき、私は「冗談とも本気ともつかない、つぎのような文章を発表した。

「われわれは、この干潟シンポを機に圧倒的な権力の壁に生身の体をなげだして捨身でぶつかっていき決意である。……ドンキホーテにつづけ……」

敗けつづけてきたといわれている闘いの中で、断固とした闘いの、反撃の拠点をきずきあげていく。あらゆる闘う住民との連帯がそのことを可能にしてくれるだろう。魚とも鳥たちとも連帯を強化していく。

敗れても、敗れても闘いつづけよう。

たとえ一人になっても闘いつづける信念を持つことが大切だろう。あのムツゴロウの愛のジャンプを見よ。

豊前の闘いに学ぼう。

面白く闘おう。そうだとビハゼのごとくはねまわろう。さらにナンセンスな闘いをおおまじめにやりぬこう。ヤナギのごとくやわらかく、鋭いムチとなり、しかも固い団結をきずきあげていこう。

さあ、ガタフィンに乗って公団と機動隊に立ちむかおう。機動隊の全滅は近い。ムツゴロウ群団よ飛びはねよ。ヤマノカミよいかれ。ドウキンよ泥深いガタの中からキバをむけ、アゲマキよ水鉄砲を発射せよ。カニたちよ強力なハサミをふりあげよ。鳥たちよ鋭い口ばしをたからかにかかげよ！」

一万ヘクタールの干潟の海を消滅させる長崎南部地域総合開発計画は、幸いにして幻の計画となった。しかし、闘いはまだ、続くであろう。この物語は「干潟の海」をめぐる三十数年にわたる、海を守った漁民を中心とした闘いの記録である。

一九八九年六月

山下 弘文

目次

はじめに

第1章 いのち湧く泥の海——有明海・諫早湾の自然・生物・漁民・漁法……………11

干潟は生きている 12

山・川・海がつくった広大な干潟 15

大陸・半島につながる独特な生物たち 19

ムツゴロウ／ハゼクチ／ワラスボ／ヤマノカミ／アリ

アケシラウオ／デンベエシタビラメ／エツ／貝類／カ

ニ類／一八科・一二〇種の水辺の鳥／生きた化石・シ

ヤミセンガイ

人と干潟のかかわり——農法と漁法 34

田畑を肥やす干潟／ボラ長者を生んだ「石干見」

魚のゆりかご・作物の湯たんぽ 39

第2章 有明海干拓史——泥と潮との闘い……………41

干拓前史 42

巨大開発の時代 45

一七万ヘクタールの「有明海地域総合開発計画」／軌

を一にした長崎大干拓計画

第3章 長崎大干拓の中止と再浮上——漁民の立場と行政の立場……………59

漁場の豊かさを見直した漁民 60

海を生かす経済効果と干拓の経済効果 64

大干拓推進派の動きと説得活動 68

執拗な県の攻勢 71

大干拓一転中止へ 75

「多目的干拓」への転換・再浮上 76

都市化・工業化に比重を移した南総計画

第4章 干拓反対運動の広がり——手を結ぶ漁民と市民……………83

「諫早の自然を守る会」の誕生 84

作家・野呂邦暢さんと自然保護 88

難航する漁業補償交渉

休止、再浮上——変転する南総計画 96

活気づく住民運動 100

個人参加・現地主義・しゃばらないの三原則／山階博士を巻き込んだハプニング／老雄の出会い

第5章 淡水湖造成計画の矛盾——暮らしと遊離した湖に未来はあるか……………107

知事の思いつきから始まった計画

ねじ曲げられた水質委員会の答申 110

「飲める水」か「飲むべき水」か 116

「淡水湖」の矛盾隠す県／暮らしと遊離した湖に……

／「圧力」の公表／「純学問的立場」とは？／アセスメントと科学者の社会的責任

第6章 「制度の海」と「自然の海」

——漁業補償大筋妥結と反対運動の拡大

……135

南総計画再転換・再々縮小 136

あばかれた極秘資料 140

補償交渉大筋妥結の一方で 144

湾外漁民の意思表示 148

「佐賀の乱」にたじろぐ県当局／連帯する守る会と漁

民／諫早湾は有明海全体のゆりかご

全国の干潟を守る運動との連帯 154

農民にとっての諫早湾 158

第7章 住民無視のアセスメント——合意を目的とすれば合意はならず……………169

知事の「重大決意」と反対漁民の危機感……………170

アセスメントは開発の免罪符か……………173

不信呼ぶ開発前提のアセスメント……………180

七九六通の意見書／代案なきアセスメントの問題点

漁業への影響大とする佐賀県調査……………188

一五〇〇隻の大海上デモ……………190

第8章 最後のあがき——政治縮小そして強行突破……………195

無原則ぶりを露呈した縮小案……………196

同意漁民の反乱……………200

不意打ちの埋立て出願……………202

同意を取り下げる漁民たち 209

湾内漁民の再反乱／知事の哀願／金また金の攻勢

機動隊に囲まれた漁協総会 216

関係市町への同意強制 222

第9章 理念なき巨大開発計画の終えん・

そしてつぎに来たもの

229

理念なき行政の迷走 230

南総計画一転中止／ムツゴロウ構想／政治の裏側

行政は何かを学んだか 236

またしても漁民ぬき／足して二で割る政治決着

防災の名にふさわしい計画か 242

二〇〇年を耐えるダム？／調整池は有効か

終章 干潟を知り干潟とともに——有明海・諫早湾の暮らしと未来……………249

干潟を守った漁民たち 250

藻場のだいじさ／藻にかわる泥質干潟／自然を守るこ

とは漁業を守ること

たったひとつの自然の干潟とともに 254

あとがき 258

第1章 いのち湧く泥の海

——有明海・諫早湾の自然・生物・漁民・漁法



暮れてゆく干潟

干潟は生きている

いまは亡き芥川賞作家野呂邦暢さんは、長崎南部地域総合開発事業（南総計画）に反対する住民団体として、一九七三年十月に発足した「諫早の自然を守る会」の代表としても、各方面で活動していた。

その野呂さんが、守る会の機関誌『干潟は生きている』に書かれた「私の諫早湾」という、短い随筆を紹介することから、物語を始めることにしよう。

「六月下旬、知人の出版記念会が博多で催された。それに出席するためと他の用事もかねて博多へ出かけ、二泊して今、帰ったところである。

都会はいいが疲れる。めったに会わない友人知人とおしゃべりをかわせるのも都会のたのしみといえるだろうが、そのためには混雑した人むれと、悪い空気と噪音をがまんしなければならぬ。

長崎行き急行列車にのりこむと、だからくたくたに疲れている自分を意識する。それで座席に深々と身を沈めればほっとする。黙っていても列車は私を諫早へはこんでくれる。

しかしなんといってもうれいのは車窓から有明海を望見するときである。帰ってきた、と思

うのは列車が諫早湾を左に見て走るときである。

窓に顔をくっつけて海を見入る。

何百回と眺めて見慣れた諫早湾のたたずまいだが、何度見ても私は飽きない。

多良の屋根と雲仙岳がかえこまれた円形の水域はいわば私の故郷の象徴ともいえる。

私は漁師ではないから、ここで魚をとっているわけでも、ノリを栽培しているわけでもない。そうではなくて肉体に必要な糧と同じようなもの、魂の糧とでもいうべきものを私は諫早湾から得て来たと信じる。

それは目で見ることとはできない。手でさわれもしない。重さを量ることもできない。無形のものである。

諫早湾によって私は自分の内にある何かが更新させられ、再生することを自覚する。

私はいつてみればこの海と共に生きているということが出来る。諫早湾は私の一部であり、全体でもある。

車窓からの眺めはいつ頃がいいとかるがるしく決められない。

朝、湾の水面が目映照えてまぶしく輝く眺めもいいし、曇り日、海と空のけじめもつかぬほどにすべてが灰色の光に煙る情景もすてがたい。神話で物語られる混沌とはまさしく曇り日の諫早湾のごときものであるかと私は想像する。

雨の日は雨の日でまたいい。肥前浜あたりの漁師町に今も残っているのは、昔の有明海周辺の

漁村の雰囲気である。

風が強い日も諫早湾は入りくんだ内海ゆえたいしたことはない。波はさほど高くない。この水域が沿岸に与えている恩恵を今まで誰かが考えてみたことがあるだろうか。魚介やノリ以外に、である。

諫早湾はそこから蒸散する莫大な量の水でそこをとり囲む植物をうるおしているだろうし、対流する空気の温度にも影響を及ぼしているだろう。われわれの先祖が諫早に住みついてから数万年、数千年にわたってこの海は有形無形の力を發揮してきたことは疑いをいれない。

諫早の自然はこの海と共に長い間、微妙な平衡を保って来た、と私は想像する。海と向いあうとき、私は謙虚にならざるを得ない。“自然”も“海”も、ある国の言葉では女性名詞に分けられるという。

死したものを再生させ、新しい生命を産み出すからである。」

少し長く引用しすぎたかもしれない。しかし、これから物語ろうとするすべてのエッセンスが、この短い好随筆にこめられていると思ったからである。

以下、この物語の背景となる、有明海諫早湾の自然についてふれておくことにしよう。